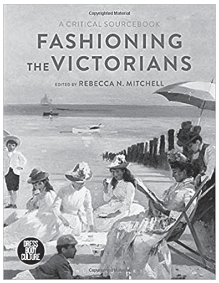
書　評



Rebecca N. Mitchell, ed.,
Fashioning the Victorians
（London: Bloomsbury Visual Arts, 2019）

山村明子著『ヴィクトリア朝の女性たち
――ファッションとレジャーの歴史』
（原書房、2019）

坂井　妙子

1．Rebecca N. Mitchell, ed., *Fashioning the Victorians*

本著はヴィクトリア朝期のファッションに関する歴史資料をまとめた資料集である。収められている資料は、Thomas Carlyle, *Sartor Resartus*（1836）, Thorstein Veblen, ‘The Economic Theory of Woman’s Dress’（1894）, Eliza Lynn Linton, ‘The Girl of the Period’（1868）など、この類の資料集には必ず収録されているものから、ヴィクトリア女王のウエディングドレスに関する記事、アーデント・ホルトのファンシー・ドレス（仮装用ドレス）に関する著書の一部、下層中産階級の女性を主要読者とした『マイラズ・ジャーナル・オブ・ドレス・アンド・ファッション』の記事まで多彩である。資料は、1理論、2服装改革、3クリノリンとコルセット、4男性服、5式服、6服飾産業、7他国の影響、8まとめの8つのセクションに分類され、各セクションの冒頭に扱う資料の概要が記されている。それぞれ1から5つの資料が収録されている。

イントロダクションでは、19世紀の女性ファッションのスタイルの変遷を現存資料の写真と図版で補いながら、解説している。服飾用語はベーシックなものから上級者向けまでボールドで示し、巻末に用語集を用意することで、読者の理解を助けるサービスを忘れていない。しかし、コンパクトな章なので、初学者には多少わかりにくい部分もあるだろう。西洋ファッションの概説書を傍に置いて読むことを勧める。ここで基本知識を習得した後、読者は収録資料にあたることになる。特徴的なのは、上記8つのセクションの並びである。1では、19世紀の代表的な服装理論を時代順に4点紹介し、次に、ヴィクトリア朝後期に盛んになった服装改革で扱ったエッセー4点の抜粋へと続く。ここまでは類書と同様の資料の並べ方であるが、第3セクションでは、時代を少し戻り、ヴィクトリア朝中期に大流行したクリノリンとコルセットに関する批判記事が続く。さらに、第4セクションは男性服に関する資料の紹介である。つまり、第3、第4セクションでは先行する二つのセクションよりも具体的、かつ、ファッションの細部に焦点を当て、読者がヴィクトリア朝のファッションをイメージしやすいよう工夫が施されている。わけても、第4セクションの資料の選び方、順序は秀逸である。通常、19世紀の男性服では、ボー・ブランメルのダンディズムが取り上げられ、その後、7, 80年もの空白の後、突如としてオスカー・ワイルドの審美主義的・突飛な服装が紹介されるが、編者はダンディズムまでの男性服を “Fraser’s Magazine”（1837）の記事で説明させた後、“London Society” 掲載の ‘Modern Beau Brummellism’（1867）へとつなぎ、最後に審美主義者を戯画化した演劇 “Patience; or, Bunthorne’s Bride!”（1882年初演）の抜粋で完成させている。審美主義的な服装は奇異であったからこそ、取り沙汰されたが、ここまでの変化の道のり、そして世紀末デカダンスが紡ぎ出した男性服の異型を服飾史的に破綻なく、資料だけで説明する手際は素晴らしい。

第5セクション以降は、一見すると、編者の趣味と関心を元に集められた記事のようだが、実際はそうではない。第5セクションでは、通常資料集で取り上げられることがほとんどないウエディングドレスや喪服、子供服とファンシードレスの資料が提示され、ヴィクトリア朝人の衣生活の多面性が披露される。続く第6セクションは、服飾産業に関する記事である。

ミシンの開発と化学染料の発明は、大量生産とイギリス人の衣服の平準化を促す一方で、衣服を従来の階級指標から、個人的な趣味を反映するものへと変えていった。このことはさらに、フランスのモードの猿真似ではない、イギリス独自のファッション（ブリティッシュ・ファッション）の発展へと繋がる。第7セクションでも、編者の独創性溢れるセレクションが続く。ファッション王国、フランスの影響だけでなく、1884年11月にナイツブリッジで開催された「日本村」と日本のファッションを解説しているのである。これらの記事は、ヴィクトリア朝イングランドが持つファッションのダイナミズムを読者に体感させるのに十分であろう。

各資料の冒頭には、著者の基本情報や作品の概要が説明され、いずれも簡潔かつ、洞察に富む。例えば、資料としては広く知られているEliza Lynn Linton, 'The Girl of the Period'（1868）では、化粧とファッションを「内面の不道徳を外見で表すもの」として痛烈に批判するとともに、むしろ好戦的愛国主義に近いナショナリズムがリントンの批評の基盤をなすと、編者は解説している。派手なファッションの否定と好戦的愛国主義はさてどのように結びつくのか、と読者は期待を寄せて資料を読むだろう。また、作品の概要が冒頭で適切に示されているために、読者の注意を著作の芯へと向かわせている。例えば、Mary Eliza Haweisが "The Art of Dress"（1879）の中で主張する "good taste" を反映した衣服とはどのようなものだろうか？ "good taste" は特定のスタイルを指すわけではないので、文字資料を辿りながら想像力を働かせたほうが良いのである。

本書に収録されたエッセーは、その多くをインターネット上で読むことができるが、編者はヴィクトリア朝という時代の特徴を的確に捉え、セクションを巧みに組み立てることで、一冊の作品に仕立てている。

2. 山村明子著『ヴィクトリア朝の女性たち――ファッションとレジャーの歴史』

本書はヴィクトリア朝後期から20世紀初頭のイギリスにおける上層中産階級の女性たちの衣服を、余暇利用の発展と関係づけてまとめたものである。前半では女性たちがスカートの着用に執着した様子とその理由を考察し、後半では男性の衣服であったテーラードのジャケットとコートが比較的スムーズに女性服に取り入れられたことが語られる。そして、最後の二

章では、折衷例が示されている。使用した資料の中心は、『クイーン』をはじめとする高級ファッション誌である。

西洋では、スカートの着用は女性らしさと直結したが、乗馬や自転車での遠出などの活動が中産階級の文化に取り入れられていくヴィクトリア朝後期には、女性たちは衣服の利便性と、従来の女性らしさを天秤にかけることになった。山村によると、ズボンを履くよりもスカートの「優美」な改良によって、大方、スカートに軍配が上がった。上着の方はこのような葛藤はなく、快活で健康的な女性美を体現するものとして素直に取り入れられていった。このことを乗馬服、自転車用衣服、テーラー・メイドのスーツ、自動車用コートとゴルフ用の衣服から説いている。

章立ては、余暇利用のための衣服（スポーツ着でもある）を種類ごとに論じる体裁を取っているが、実際には、女性は「脚」を見せるべきか否かの問題（第2章）、スカートの様々な改良、および妥協（第3章）、紳士用ジャケットと女性用としての発展（第4章）、紳士服との共用（第5章）、女性らしい組み合わせ（第6章）が主要なテーマである。これらのテーマをファッション誌掲載のイラストから解説している。雑誌以外の資料は、ほとんどが邦訳のある研究書から引用されている。

本書が主に扱っているのは、1870年代後半から第一次世界大戦前までの比較的短い期間だが、最終2章を除き、時代考証がやや曖昧で、服飾史とイギリス文化史の両方に精通していないと多少混乱する。このことは、山村が多用する「イギリス女性」（イギリス人女性、もしくは、イギリスの女性と表記すべきではないのか？）が、むしろ現代日本の「大人女子」やその予備軍を彷彿とさせるために、なおさら際立つ。日本の「大人女子」とは、比較的経済的に恵まれているために、多岐にわたる消費活動をつまみ喰いすることができるやや年齢のいった女性たちであるが、彼女たちのプロトタイプを19世紀末のイギリスに発見するには無理がある。ヴィクトリア朝後期のイギリスで、なぜスカートが少しずつ、しかも恐る恐る改良されなければならなかったのかは、時代特有の感性、当時の女性が交渉しなければならなかった文化的・社会的抑圧の詳細な考察抜きには答えられない。山村に脱線する意図はなかったのかもしれないが、当時のイギリス社会で極めて重要だった階級意識の議論さえ、50ページ以上読み進まないと出

てこないために、イギリス文化史としての考察を追いにくくしている。

もっとも、山村の関心が家政学にあることは明らかであり、この点は高く評価されるだろう。考察された時代に、スカートの丈がいかほどならば「優雅」で「シンプル」とみなされたのか、ジャケットの身幅のゆとりと「若々しさ」はどのような関係を結んだのかなど、衣服の構成上の特徴を服飾美学の観点から捉えているからである。また、パターンの解読に心血を注いでいることも明らかである。本著に登場する衣服を山村が実際に製作してみたのかどうかわからないが、作ろうと思えば作れそうなほど、パターンの解読には熱がこもっている。この意味で、本著は、イギリスらしいモダンなファッションへと突入する時代の、服装上の様々な試みを豊富な図版を使って描いた力作と言えよう。

――日本女子大学教授